
ギフト

大沢 綾子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ギフト

【Nコード】

N0443J

【作者名】

大沢 綾子

【あらすじ】

去年のものです。クリスマス用の短編をお送りします

上司との不倫関係に悩む、俺　しかし、二年もその関係を続けて限界だと感じた主人公は、聖なる夜にすべてを終わらせて別れようと決意するが……。

情事が終わったあとのベッドの上で、俺は眠ったふりをしながら背中が身支度している音を聞く。濡れた身体をタオルで拭つて、さっきまでハンガーに掛けていたワイシャツを取っている。袖を通してながら小さな咳払いをして、次はスラックス。どういう手順で着替えていくか、俺はすっかり知り尽くしている。彼に会うのは、初めてじゃない。この二年間、俺たちはずっと周囲の目を気にしながら会ってきた。場所と時間と部屋番号。何日か前に彼からメールが届けば、俺はその日に合わせてスケジュールを調整し、そして彼に会う。それは大抵平日の、彼の仕事が忙しくなる月末や五の付く日が多い。その日だと、どんなに遅くなっても家族に言い訳が効くからだ。でも、絶対に泊まっていけない。彼は俺のために部屋を予約して、そして俺を残して家に帰る。そして俺は、彼がいなくなってしまった部屋に取り残されて、わずかな時間を共にしたベッドでいつだって眠れないまま朝を迎えた。

しかしもう、そんなのは限界だ。この二年間というもの俺はただ、彼の手軽なセックスの相手に甘んじてきた。一緒に食事をした事もなければ、喫茶店でコーヒーさえ飲まない。確かに出会った頃はそうやって、居酒屋で飲んだ事もある。でもそれは、俺たちがこんな関係になる前の話だ。酔ったはずみでベッドを共にして以来、お茶の時間さえ消えた。当たり前だ。彼にとっては、俺はただ手軽に抱ける都合のいい相手。俺も俺で求められている関係を先取りして、メールが入れば誰に不義理を働いても予定を変えた。自分から、進んで後腐れのない相手であり続けて、そしてもうどちらを向けばいいかもわからないほど身動きが取れなくなっていた。

「そんな奴とは、いい加減縁を切れよ」

俺にそう言ったのは、昔つき合っていた男だ。この世界は意外と狭くて、大学を卒業後ひよんな事から賑やかな出会い系のバーで顔を合わせた。社会人になって二年目ぐらいの夏だ。それ以来ずっと友達としてつき合っている。男は俺の初めての相手で、忘れがたいといえは忘れがたい。

「で、俺とよりを戻そうぜ」

「冗談じゃないよ」

俺は言われて、笑いながら一蹴する。当時さんざん浮気に泣かされてきた身にすれば、二度とは関係したくない。だが、家庭持ちの彼とこいつとどれほど差があるのか、俺にもわからない。割り切ってしまえば、彼よりむしろこいつの方がマシなのかも、とは思う。思うだけだ。気持ちとしては、やはり領けない。

「どうしてだよ。俺だって、いつまでもフラフラつまみ食いし続ける気はないぜ。おまえとなら、やってけるような気がする」

「おまえがするだけだろ。俺は、絶対に嫌だ」

「頑固者」

「ほっとけ」

そういう会話を交わしたのは、夜のファミリーレストラン。だからと長話で時間をつぶし、もう学生でもないのに始発の時間までそこにいた。そういう事も、彼とはしない。ホテルで会っても、もう決まったように同じ事を繰り返すだけだ。ほんの少し会話をして、キスをし、服を脱ぐ。彼と俺との間にあるのは、ただ、互いの欲望だけのようない気がする。少なくとも彼にとってはそうだろう。すでに子供がいるような、役職にも就いて仕事の出来る男は浮気をするにもソツがなくて、俺を置いて部屋を出ていく時ためらっている様子を感じた事はない。眠っていると思いついて、無言でいつも部屋を出るからだ。想いを募らせ、心の中に訊けない言葉だけを増やしていくのは俺だけだ。

お子さん元気？

幾つになつた？

この前の休日つて、家族でどこかに出かけた？

そんな事も俺は訊かない。訊いてどうするんだ、という気もするしそれは俺たちにはルール違反だ。だから俺は、彼の妻だという女性がどんな顔をしているかさえ知らない。知りたくもない。俺は男というだけで、彼女には絶対太刀打ち出来ないとよくわかっていた。分相応。俺は自分が女とは一切どうにもならないゲイだと、知っている。家庭があるような男と、悪いとわかっていてズルズル関係し続ける馬鹿な奴だと承知している。浮気をされるのが、どんな気分かも知っている。だから、分相応。どうせ、頑張つて略奪したところで男同士じゃ大手を振つて歩けるようにはならない。それなら、彼の普通の生活を邪魔したくないと本気で俺は思っていた。

でも、限界だと悟つてしまった。このままだと俺は、いつか自分の想いの海に溺れて沈み、二度と息が出来ないだろうと思う。愛されたいと望んで、馬鹿をやらかす気がする。だって、彼に会えない時も俺は彼の事を考えている。誕生日やクリスマススのイベントに、必ずといっていいほど渡せないプレゼントを買つて、それは部屋のクローゼットに増えていく。最初に買ったのは、腕時計。彼の、誕生日にそれを買つて綺麗なりポンをかけてもらった。次には昇進祝い。新しくなる名刺を入れられるようにと、本皮のブランド物をはりこんだ。俺が彼とそうだった記念日も、俺はちゃんと覚えていてペアのワイングラスを買つてみた。そして、今日はクリスマスだ。俺は、それさえ忘れずに馬鹿なプレゼントを買っていた。何枚も写真が飾れるように台紙がくり抜かれた、額縁型の写真立て。彼が、家族の写真を飾るだろうと想像しながらだ。

ほんとに、俺は馬鹿だ。

でもこの広い世界のどこかには、俺と同じような寂しい思いで今こ

の瞬間を好きな誰かと過ごしている人間もいるかもしれない、と想像する。千人に一人ぐらい、あるいは一万人に一人ぐらいはいるかもしれない。愛しているのに、愛されなくて、打ち明ける事さえ出来ない人がいるかもしれない。

ひな祭りやゴールデン・ウィークといった家族行事には、絶対に会えない恋人。彼は俺にとってはそういう恋の相手だった。彼にとつての優先順位は、いつでも家族。そして次に仕事。俺はせいぜい良く見たところで四番目とかそれぐらいで、次点にもなれない。職場でさえ、彼が目をかけて可愛がっている部下は俺じゃない。とつくに違う部署に異動して、そんな絆さえ俺からは奪われている。この秋の異動で俺は、別の販売部門に移った。だからもう、課長ハンコ下さい、とさえ言いに行く事はない。本当に、ただ身体を繋ぐだけの関係になってしまった。

(もうね、本当に辛いんだ)

と俺は、心の中で呟く。部署が変わるまでは、それでも一緒にプロジェクトを進めていく事が出来た。一緒に一つの事をしていれば、俺も少しは自分を慰めてなだめていられたけれど、それさえ失ってしまえば本当に馬鹿な事をやりそうになる。彼を社内の廊下で待ち伏せしてみたり、用もないのに内線をかけてみたりしそうで怖い。それがそのうちエスカレートして、ストーカーのようにつきまとい始めたからお手上げた。実際に、俺は何度か本当にそれをやりかけた事がある。寸前で我に返って踏みとどまったけれど、思い出すだけで自分が怖いと思う。

きっかけは、俺の異動を稟議で上げたのが彼だと知った事だった。なんだかもう、俺は彼に追い払われたように感じて、そして落ち込んだ。それを知る前に彼から上司としてその話をされた時も、俺は似たような感情を持った。それでも、会社が決めた事だからと無理やり自分を納得させて、はい、と答えたただけ。だけど、彼が俺を自分の部署から追い出した、と思うと辛くて悲しい。

そんな事しなくても、と俺は思っている。ただ、終わりにしたい

と彼が言えば頷いたのに、と思つてしまう。だから、俺は今夜の待ち合わせのメールをもらった時に、決めた。今日が最後だ。彼と会うのは、今夜が最後。もう違う部署に移つて、そうそう顔も合わないし、納会だ新年会だ、歓送迎会だといつて飲み会に行く事もない。彼は彼、俺は俺。決めなきゃ俺は、どこにも行けない。

背中、まだ俺は彼の気配を感じている。小気味のいい衣擦れの音がしているのは、たぶんネクタイを絞めているんだろうと想像する。あとはスーツの上着を着て、コートを羽織ればそれで終わり。そうしたら、俺は泣くのを我慢しなくていい。心の中でさよならを言つて、泣いてしまえば少しはすっきりして明日また仕事に行けると思う。

彼が部屋を出て行くまで、あと何分だろうと俺は薄暗いホテルの壁紙を凝視しながら考える。一分だろうか、五分だろうか。早くしてくれないと、俺の心から涙が溢れ出す。今だって、瞬きするたびにこぼれて枕を濡らす。なのに、今日に限って彼はなかなか出ていかなかった。それどころか、彼の足音はベッドに近づいて来る。

俺は一瞬背中を固くして、必死に彼がこちらに来る理由を思い浮かべた。忘れものだろうか、時計か何かをベッドサイドの机に置いたままだっただろうか。

ああ、思い出せない！

そうしたら、背後でぎしりとベッドが沈み、彼が腰を下ろしていた。俺は途端にパニックになって、ぎゅっと目をつぶる。目の縁にぱいに溜まっていた涙が、ポロポロとこぼれていった。その俺の目を、肩越しに伸びてきた彼の手のひらが覆った。

「いい加減、ためきを決め込むのはやめたらどうだ」

言われて、俺はくちびるを噛む。起きているのはバレている。泣いているのも、すでにごまかすには手遅れだ。でも、だからって何

を言えばいいのだろう。俺にはやっぱり、彼に言う言葉はどこにもない。

「毎回、毎回。おまえは眠ったフリをして俺を見送る。最初の夜だけだぞ、ドアまで見送ってくれたのは」

だって、と俺は心の中で反論する。それしか俺に出来る見送り方なんて、ありえないじゃないか。俺はそこまで、ドライになれないし割り切れない。平気なフリさえ出来ないから、それが俺に出来る精一杯だった。黙っていたら、彼が続ける。

「でもまあ、それも全部俺のせいだからな」

そうだよ、その通りだ。心の中で叫んだのに、それが聞こえたみたいに彼が背後でため息をついていた。それから、しばらくの沈黙。俺はただ、黙って彼の手のひらに涙だけをこぼしていく。彼が、何を言わせたいのかわからない。何を言おうとしているのかわからない。だから、俺はただ黙っている。

「長谷川、俺はやつと自由になつたんだ」
ぼつり、と彼は言っていた。

自由になつた、という意味が俺にはわからなかった。なおも黙っている、彼はまるでモノローグのように続けていた。

「俺の家庭の事は。これは、社内でも本当に一部の人間しか知らないが、俺の妻はもう七年ずっと植物状態のままだったんだよ。それが、半年前にとうとう人口心肺装置を外した」

彼女の両親がやっと踏ん切りをつけてね、と彼が言う。俺は思わずベッドに起き上がっていた。そんな事、初めて聞いた。彼は俺と目が合うと、俺の背後にこんもり盛りあがったシーツを引っ張って素裸の俺の身体を包んでくれた。

「いくら暖房が効いていても、風邪をひく」

俺は彼に持たされるまま、シーツの端を握って前を掻き合わせた。

でも、あまりの事に呆然としてそれ以外はただ、ちよこんとベッドに正坐して彼を見ているだけだ。

「し、知らなかった……」

「言えないよ、こんな話は重すぎて」

確かにそうだ。俺だって、聞くのは重い。どう返事をすればいいかわからないからだ。ただ、彼はそれでも話したいのだろう、と思う。

「俺と彼女は、最初からちよつと変わった関係だったんだ」

大学受験前の少女と、大学生の家庭教師という出会いで彼と奥さんは始まった。一方的に熱を上げて、追いかけてくれたのは奥さんの方。そして彼女は、彼がゲイだと知っていた。それでも彼女は諦めずに、とうとう結婚にまでこぎつけた。

「相当な資産家のお嬢様だったんだよ。それに、エキセントリックな性格でね。風変りで面白くて、好きかと訊かれれば俺は好きだった。でもそれは、男女の感情じゃない。それを言えば、彼女の感情だって恋愛じゃないのはわかっていたんだ」

それでも結婚したのは、彼女が子供を欲しがったからだ。男女としての接触はいらなくて、子供だけは欲しい。

「そんな、馬鹿な……」

「馬鹿だ。俺もそう思うよ。でも俺も子供は欲しかった。どうせ無理だと諦めていたから」

「じゃあ……」

「体外受精だよ」

そう言って、彼は苦笑する。

「俺がゲイで、彼女に対してそういう目を持たなかったから、彼女は安心してまるでどこかの芸能人を追いかけてまわす気楽さで楽しんでいたよ。そういう意味では俺達は、やっぱり愛し合っていたと思う」

それは、兄と妹のような愛だったに違いない、と俺は想像した。なぜなら、思い出を話してくれる彼の目は驚くほどやさしくて、喪

失の悲しみをたしかに宿している。

「どこか、この世の者じゃないようだった。おとぎ話の妖精みたいだね。そういう点では、彼女が遣した娘の方がよっぽど現実に生きているよ」

「……幾つ？」

「七歳」

「じゃあ、と俺は息をのむ。そして、その先が訊けずにただ彼を見つめた。彼がちよつと頷いて、あんなに欲しがっていたのに、と続ける。

「彼女は娘を着飾らせるつもりでいたのに、それは出来なかった」

俺は、もう彼の顔を見ていられなくて前のめりに彼の肩に額をぶつけた。その俺の身体を彼が抱く。

「言ってくれば良かったのに……」

俺の涙が、彼の肩を濡らしていく。鼻腔に香ってくるのは、ホテルに備え付けのソープの匂い。彼が俺の頭を撫でてくれるたびに、鼻をくすぐった。

「そうだな、言えれば良かった。でも、つい最近まで俺には、彼女や彼女の両親との関係がどこで終りになるのか予測も出来ない状態だったからな」

「それでも、言つてよ」

そうしたら、俺はただ彼を信じていられた。それだけだつて、俺にとつては不毛な関係が続いている罪悪感から解放してくれる大事なものだつた。

「言えないさ。それを言つてしまえば、俺はおまえを騙す事になる」

「どうして!」

顔を上げると、彼が微笑んで涙に濡れた俺の頬を両手で拭つてくれる。

「出来ない約束をするんだ。俺が、おまえに、いつかちゃんと恋人同士になれるから、と言えばそれは彼女が死んだら、という事になる。心のどこかで無意識に、彼女に死んでほしいと望むようになる。

俺は彼女を、男としては愛してなくても、それでもまるで魂の一部のように思っていたんだよ」

彼の言う意味はわかるし、気持ちもわかった。俺は、仕事を通して彼がそういう男だと思ったから部下の立場のまままで恋に落ちた。それがいつしか不倫になったのは、望んだ結果じゃない。むしろ、浮気が出るような男だと知って、心のどこかで失望した。そして彼がこんな冷たい男だとか、身体だけでも満足出来る奴なんだとか考えて、これ以上はもう失望したくなくて俺は本気で関係を断ち切るつもりで退職届まで書いた。

「俺に、捨てて欲しかったの。ほかに好きな男が出来たから、もう終わりって言っただけだったの」

彼の腕の中から、俺は身体を離して言う。目の前で彼の顔が歪んでいた。

「まさか。でもまあ、その時は仕方がないとは思っていた」

「そういう風に、悟らないでよ！俺より年上だって言っただけだよ。百歳も上じゃないくせに。そうやってずっと黙ってたから、俺は一人でぐるぐる堂々巡りを繰り返してもう、疲れはてたよ」

「すまない」

「謝んなよ、馬鹿！」

俺は頭に来て、彼の肩を拳で殴る。本当に、頭にくる奴！俺を何だと思ってたんだ。手軽な性欲処理機みたいに自分を思う方がよほど傷つく。それなら、どれだけ待つ事になっても本当の事を教えてくれれば良かった。彼の愛がそういう種類のものだったら、俺は信じて待っていられたし、幸せだったのに。この二年間に流した涙や眠れなかった夜を全部今すぐ返して欲しい気分だ。

「馬鹿！」

気持ちがおさまらなくて、もう一発入れる。やっと自由になって、あんたが欲しいものが何だか言ってみろよ、馬鹿！

「好きなんだ、克己。やっと言える。俺と一緒にいて欲しい」

彼が初めて俺を、名前で呼んだ。俺はそのショックで振り上げた拳を、中途半端に持ち上げたまま固まる。そうしてやっと、俺は微笑んだ。

「馬鹿なひと」

でも、そこも好きだと俺は思う。誰かを魂の一部のように愛しているあなたも、一人娘を可愛がるあなたも、そうして不器用な男の真心を胸に抱いているあなたも、俺はやっぱり好きだ。

夜はまだ長いから、一緒に外で食事をしようと思つた。俺は簡単にシャワーを浴びて服を身に着けるとホテルを出た。夜の街は、きらびやかなイルミネーションに輝く世界だ。どこを向いても、幸せそうな人々に出会う。彼の愛する一人娘も、今夜は祖父母の元で友達とパジャマ・パーティーをして過ごしているらしい。今夜帰らない代わりに、土日は娘とどこかへ行くと彼は言った。

「何を、食おうか」

彼が訊くから、俺はしばらく考えて答えた。

「ほら、いつだか皆で忘年会やった焼鳥屋があつたじゃない。ボロくて、壁が油で汚れた店」

「クリスマスにか」

彼はどこか無念そうに言う。

「クリスマスだからだよ。どうせ、洒落た店はどこも予約で埋まつてるし、あの焼鳥屋にまさかしんみりしに来るカップルはいないと思う」

赤いのれんに、緑の提灯。店の親父はまだ若いくせに偏屈そうで、愛想がない。それでも気易くなれば黙ってコップ一杯の日本酒をサービスしてくれる。料理の腕は確かだ。想像の中に、はつきりと焼き鳥のあの匂いが甦って思わず唾を飲み込んだ。それは、彼も同じだったらしい。底冷えがして、雪でも降りそうな空を見上げている

と彼の手が俺のマフラーを首に巻きつけ直してくれる。

「そうしよう」

彼が、頷く。そうして俺達は足早に寒さに押されるように店に向かう。その道すがら、俺は彼に頼んでいた。

「榊課長、ねえ」

「おまえ、そういう呼び方はやめろ」

「じゃあ、榊さん。ねえ、それは今はどうでもいいよ。俺を元の部署に戻して。俺とまた一緒に仕事をして下さいよ、課長！」

返事は、冷酷だった。

「駄目だ。稟議まで上げて異動させて、今更戻せるか」

「なんで、そんな事したんだよ！」

おかげで俺は、なおさら落ち込んだんだ。それさえなければ、俺も今日が最後だなんて覚悟を決めたりしなかった。彼は自分がどんなギリギリのラインで間に合ったかわかってないだろう、と思う。

「決まってる。俺が、来春その部署に異動するからだ」

「……はあ？」

ホントウデスカ、サカキサン。

あまりに意外な理由に、俺の頭の中に浮かぶ言葉はしばらく全部ロボット語のようになる。

ソレジャマタ、仕事デキマスカ。

「それから異動させるとなれば、どれだけ時間がかかるか見当もつかないからな」

「俺……手離されたのかと、思って」

ようやく日本語に戻った。そしてたどり着いたその店の前で、彼が振り向いて微笑む。

「しないさ、克己。これから先は、絶対に手離さない」

ああ、どうしよう。今すぐ彼にキスしたい。そう思っていたら、彼が代わりに俺の手を素早く握って、そして離していた。俺も彼に続いてのれんをくぐりながら、彼の家族のために選んだ写真立を思い浮かべた。渡せなかったプレゼントを全部、彼に贈ろう。そして、

あの写真立に彼の家族の写真飾って貰おう。俺はそれを見せても
らって、今まで訊けなかった事を質問しようと思つて決まっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0443j/>

ギフト

2010年10月8日11時54分発行